

# 樟若葉

夏野いづみ

「かあさん」と子に呼ばれわれも母を呼ぶ　あ音おんの響きははつ夏の風  
産む性を継ぎたる女の母とわれ互いにひそむ押し出す力

樹液が押し出す若葉のうすみどり暴力の芽は未然に摘むべし

面前の暴力は心むしばむと誰が言いしか　青嵐吹く

雨風に打たれて艶めく樟若葉　雨の手風の手ゆさゆさ揺れて

波に打たれ打たれるままに砕かれし石の無念か　水面をおおう

打つ波と打たれる石と見ておれば人はおおむね石を恐れる

砕かれてやがては砂になる石のサンドバッグを打つならば打て

ざぶざぶと雨に打たれたクスノキが何度でも生まれ変われるという

脳葉のいずこのあたりか樟若葉いっせいに揺れて心晴れゆく

〔初夏の愛誦歌〕

すれ違いざま総身に伝わりぬ風に漲るケヤキの悲鳴　佐伯裕子「未来」八三五号

木々が一斉に芽吹き始めると、それまで寡黙だった木々がことばを発しているかのように感じるのは私だけだろうか。

この一首に出会った時、いきなり心を掴まれ、初句から二句にかけての句跨りに心が締め付けられるような感触を味わった。結句のケヤキの悲鳴に作者の心の叫びを聞き、その叫びが深層心理に響き、以来、心の中で繰り返し愛誦している。

作者の心には、A級戦犯として処刑された祖父土肥原賢二の存在が深い影を落としている。結句のケヤキの悲鳴は、戦犯の家族として沈黙を強いられた作者の痛切な心の叫びであろう。

世に発することができない苦悩が、自然の木々との魂の交感の中で発せられたのだ。作者の悲鳴は、懸命に生きる一人の人間としての悲鳴であり、読者の中にある得体の知れない叫びをも代弁している。